**特別講演要旨**

**マードック：　コミンテルン・プラトン・ゼン**

**塩田　勉**

　十三歳で共産主義者、二十歳で入党、四年間は公然活動を行ない、大蔵省入省後は非公然党員としてスパイ活動にも協力、脱党後三十二歳のときマルクス主義への熱い思いを語った筋金入りの共産主義者マードックは、やがてプラトン哲学、禅ヘと踏み抜けていく。その初発の動機は、マルクスをひもとけば明かな、ある種の倫理感－－歴史の流れを見据えて己れを捨て、働く者の解放に奉仕する「無心」にあった、とは考えられまいか。

　創始者の倫理が、ロシアにおける社会主義革命の歴史的特殊性から大きく損なわれ、スターリニズムに転落し始めたころ、一途な理想主義者の少女は、反ファシズム勢力であるソ連に希望を託す一人として共産主義者の戦列に加わった。ケストラー、オーウェルによる社会主義転落の記事に触れ、ソ連のフィンランド侵攻、独ソ不可侵条約に、やがて幻滅してゆくことにはなるのだが。

　大戦後、キリスト教やマルクス主義、ヒューマニズムがズタズタになって、世の価値観は麻のごとく乱れた。諸価値の不整合をどう乗り越えればよいか。民主主義が衆愚政治と恐怖政治の間を激しく揺れ動いた古代アテネで、人々がそれぞれに奉ずる諸徳の基底にまで下りてゆき、相互に納得できる共通の拠り所を探り出す思考法（「産婆術」）を編み出したソクラテスと弟子プラトンもまた、マードックと同様、現実の政治に深く幻滅し、思想・倫理の次元に新しい政治の構想を模索（cf.『国家』）した哲学者だった。

　プラトンの「イデア」説は、現象的には無限に多様な個体に共通する概念を理性が見分ける謎を説明する方法概念であると同時に、時代の潮目で、互いに不整合を来たして軋み合う諸価値を、より深いところから支える共通の拠り所を見出す方法でもあった、とマードックは見ていたようだ。　プラトンは、その諸価値の拠り所を「善」と呼んだが、マードックは、「善」を、現代哲学批判と絡めて定位させようとした。ピューリタニズムの文脈にあるイギリス哲学は、「自由、独立、孤独、力、責任、勇気、自信、合理性、自己疎外」などのキーワードが浮かび上がらせる人格に価値を置く。ミルトンのルシファーに淵源をもつ近代ヨーロッパ人像である。他方、現代科学思想は、人間の「内心」を観察不可能な対象として倫理から排除し、実存主義も、決定的瞬間における意志の決断を偏重して「内心」の働きを矮小化した。

　マードックは、これに対して、死んだ嫁に対する評価を、内省をとおして変えていく姑の「内心」を例にとる。大仰な個人主義や肥大したエゴとは無縁な一市民の静かな心境の変化に、本質的な「善」が現れているではないか。現代哲学や科学では記述できない美質がここある、と。姑が心の裡で行なう嫁に対する見直しは、シモーヌ・ヴェイユが説く「注視」、自我から少しでも遠く、外部へ眼差しをむける「善」の実践にほかならない。姑の「内心」は、愛情と正義をもって嫁を量り直す「善」を実践しているのだ。

　ここから、マードックが関心を示した「無心」や「不立文字」など、禅の思想へはひとまたぎである。不立文字の原典の一つに「維摩教」があるが、それを日本で一番早く消化した聖徳太子は、人にはぞれぞれ拠り所とする価値があり、彼我いずれが正しいか決めがたい（「十七条憲法」第十条）、「事はひとり断（さだ）むるべからず。かならず衆とともに論（あげつら）うべし。‥‥衆と相弁（あいわきま）うるときは、辞（こと）すなわち理（ことわり）を得ん」（第十七条）と述べた。これは、異なる意見の基底にある共通の拠り所を対話をとおして研ぎ出そうとしたプラトンに通底する発想であるだけでなく、「ひとり＝自己」をでなく「衆＝他者」に「注視」せよ、「衆＝他者」を媒介にしたとき初めて、事は「理＝普遍性」を獲得すると教えた点で、プラトンが説いた「善」の観念にまっすぐに繋がり、マードックが禅に関心を寄せた理由も照らし出している。